

## ● 最優秀賞

# 子どもたちを歴史にどっぷりと<sup>ひた</sup>浸らせる授業

鹿児島県鹿児島市立田上小学校 <sup>たなべもとひろ</sup> 田邊源裕

## 1 はじめに

子どもたちにとり、6年生の歴史の授業は、遠い昔の出来事であり、自分の生活とかけ離れたもので終わってしまいがちである。そのため、「人ごと」のように思えてならないときもある。

そこで、今回、6年生の歴史の授業が、実は子どもたちにとり、身近なものであるという意識をもたせるため、地域教材を活用した授業に取り組んだ。教師自身が「身近な」ということにこだわり、子どもたちの住む「鹿児島」「田上」という視点からの教材開発に努めた。

## 2 地域教材の開発

### (1) 教師も子どもも知らない新しい事実を発掘し、教材化したもの 「発掘教材」

教師が、地域の方からの聞き取りや郷土史などから新しい事実を発掘し、教材化したものである。教師にとっても、子どもにとっても未知の内容である。その未知の内容に感動した教師の姿を通して、子どもたちも新鮮な出会い、そして驚きをもって教材に関わっていくのである。

本実践では、小单元「聖武天皇と奈良の大仏」において、国分寺の瓦を教材化したものを報告したい。

### (2) 普段から子どもたちの生活の中や地域に存在するものであるが、あまり知られて

### いないものを教材化したもの

#### 「再発見教材」

普段子どもたちが目にしているものであるが、通り一遍の内容しか知らず、さらに深い内容に改めて気付くよう教材化したものである。日常目に触れているものであるので、新しい事実にあふれた時の感動は大きいものがある。ここから、もっと知りたい、さらに調べてみたい、という子どもの意欲を導き出すことになる。

本実践では、小单元「長く続いた戦争と人々の暮らし」において、校内にある「亡師亡友の碑」や「田上小校区中園地区・前地区爆弾投下位置図」（『あゝ 四月八日田上の空襲の記録』所収）を教材化したものを報告したい。

## 3 地域教材としての機能

地域教材を活用した授業のつもりが、郷土史や地方の一つの出来事の授業で終わってしまった、ということにならないようにしたい。歴史学習では、やはり、地域から出発して日本の歴史へ、そしてまた地域にかえるような学習にしていかななくてはならない。そのためには、地域教材化の段階で、教材化したものが日本の歴史にどのように結び付くのか、日本の歴史の中での位置づけはどうか、さらに、教科書の記述のどの部分にあてはまる内容であるのか、ということをおさめるようにしなくてはならない。つまり、これらのことが踏まえられないのならば、地域教材とし

て授業では活用できないということになる。具体的に、授業では教科書の記述と対応させたり、年表のどこに位置付くのかを確認させたりする活動も取り入れるようにしたい。

#### 4 教師も子どもも知らない新しい事実を発掘し、教材化した「発掘教材」の実践【事例：小単元「聖武天皇と奈良の大仏」】

##### (1) スタートは教師の驚き、「瓦の様子が同じだ」

鹿児島県には、薩摩国分寺と大隅国分寺の2つがある。2つの国分寺の軒丸瓦の様を見比べてみると、非常に酷似していた。もしやと思い、他の国分寺の軒丸瓦の様を調べてみると似ている。文献等に当たってみると、蓮の花をデザインしたものであることが分かった。

聖武天皇の中央集権国家体制づくりの政策の一つが、全国の国分寺建立である。そこで、この軒丸瓦の様が、中央集権国家体制づくりの象徴になるのではないかと考えた。また、薩摩国分寺と大隅国分寺の軒丸瓦を教材化すれば、「鹿児島」という地域から教科書に出てくる日本の歴史を見ることができると考えた。

##### (2) 軒丸瓦の教材化に至るまで

薩摩国分寺の軒丸瓦は、薩摩川内市歴史資料館に、大隅国分寺の軒丸瓦は始良町歴史民族資料館に展示されている。「実物を教室に持ち込みたい」という私の熱意に2館の学芸員の方も共感され、貸出しの許可をいただい

た。厳重に梱包されたそれぞれの瓦を前にして、私自身が文化財の重みを改めて感じることであった。歴史資料館との連携は、文化財の教材化にはなくてはならないことである。

なお、九州内の国分寺の瓦については、『九州古瓦図録』（九州歴史資料館編）、九州外の国分寺の瓦や東大寺の瓦については『図鑑瓦屋根』（坪井利弘）にもとづいて教材化した。

##### (3) 軒丸瓦を教材として持ち込んだ授業の実際

###### ① 軒丸瓦に見入る子どもたち

本時は、「まとめる」過程として、これまで天皇中心の政治について調べたことを生かし、自分たちの住んでいる郷土鹿児島から、改めて天皇中心の政治について見直す場面である。

白布に包まれた2つの軒丸瓦を提示する。子どもたちは、最初は怪訝そうな顔をしていた。

薩摩国分寺と大隅国分寺の軒丸瓦であることを告げると、一瞬、教室にどよめきが起こった。男の子が、思わずつぶやいた。「奈良時代の匂いがする」と。早速、2つの瓦を観察してみる。子どもたちから出た意見は、以下のようなものである。

- ・瓦の大きさと形が似ている。
- ・真ん中に丸印、回りに花びらのようなものが広がっている。
- ・2つの瓦とも、重くてがっしりしている。



●写真1／大隅・薩摩両国分寺の軒丸瓦



●写真2／「奈良時代の匂いがする」

全員の子どもたちが、2つの瓦の類似性に気付いてくれた。

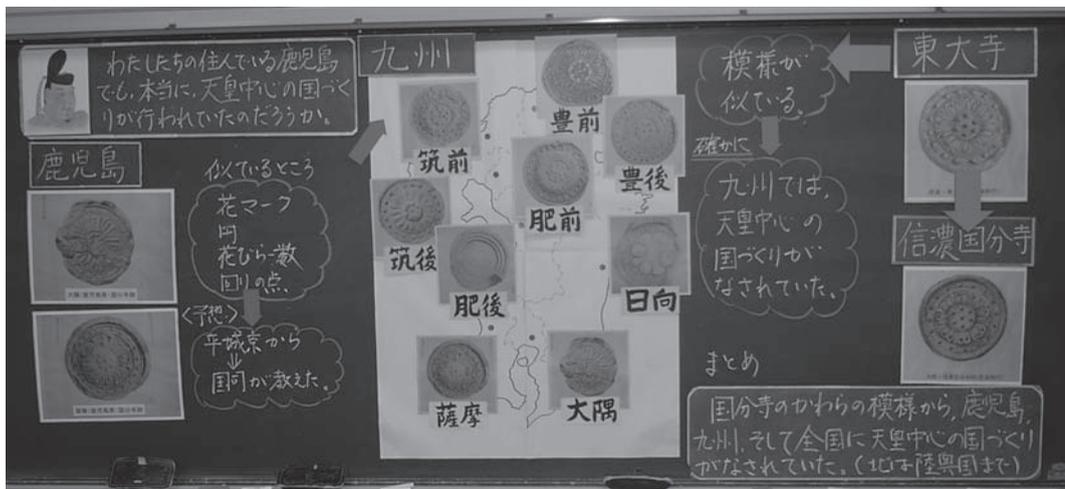
② 九州内の国分寺の軒丸瓦の模様を確かめる子どもたち

子どもたちは、国分寺が全国に建てられたことは、既に学習している。そこで、他の国分寺の軒丸瓦の模様も見たい、という意見が出た。早速、他の九州内の国分寺の軒丸瓦の写真を提示する。鹿児島から近い所である日向、肥後、肥前、筑後、筑前、豊後、豊前の順に出していった。子どもたちが比較しやす

いように、板書の際、九州の地図の上に九州内の国分寺の軒丸瓦を添付していった。花びらの数や大きさなど違いも見られるが、子どもたちは、次のような意見を述べた。

- ・九州内の国分寺すべての軒丸瓦の模様が似ている。
- ・瓦を焼くときの「型」が、九州内で同じように使われていたのではないかと。

九州内の国分寺の瓦の模様の類似性から、「国分寺建立の詔」が確実に九州内にも行き届いていたことに気付いてくれた。



●写真3 /九州内の国分寺の軒丸瓦の模様の比較

③ 九州外の国分寺や総国分寺の東大寺の軒丸瓦の模様を確かめる子どもたち

子どもたちの頭の中では、確信めいたものが出てきた。九州外の国分寺や総国分寺の東大寺の軒丸瓦の模様も同じなのではないか、という予想である。子どもたちの、是非知りたい、確かめたいという気持ちが伝わってきた。

東大寺と信濃国分寺の軒丸瓦の写真を提示した。子どもたちは、次のような意見を述べた。

- ・やはり、似ていた。同じ花をイメージしてつくったのではないかな。

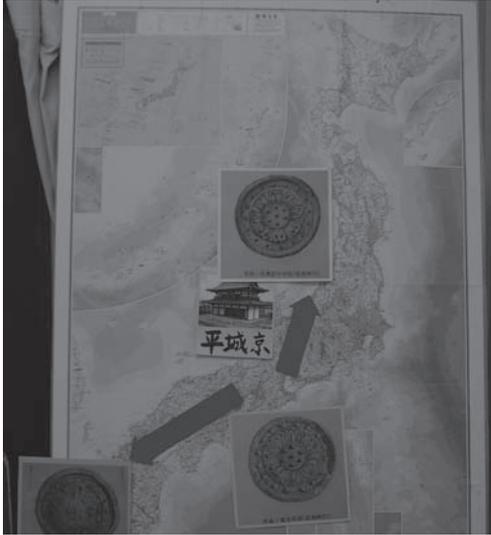
(※文献によれば、仏教に深いつながりの

ある蓮の花をイメージしている。)

- ・国分寺の瓦は、聖武天皇の命令で同じような模様、同じような大きさで焼くようになったのではないかと。

さらに、薩摩国分寺の復元模型の写真と教科書の陸奥国分寺の復元模型の写真を見比べていた子どもが、「国分寺の建物の配置がほとんど似ている。だから、瓦の模様までも似ていたのかもしれない。」と述べた。

総国分寺である東大寺の軒丸瓦の写真と北の信濃国分寺、南の薩摩国分寺の軒丸瓦の写真を日本地図上に貼り、矢印を2つ子どもに渡すと、写真4のように矢印を貼った。中央集権国家体制が軒丸瓦を通して日本に広がっ



●写真4/瓦を通して中央集権国家体制をみる

ていったのだということを表したと言える。瓦を通して、地域の歴史が日本の歴史につながった瞬間である。

**5 普段から子どもたちの生活の中や地域に存在するものであるが、あまり知られていないものを教材化した「再発見教材」の実践**  
**【事例：小単元「長く続いた戦争と人々の暮らし」】**

**(1)スタートは子どもの声、「亡師亡友の碑って何？」**

本校の校庭の一角に田上の森と呼ばれる場所がある。イチョウやシイの木などがある憩いのスペースである。その中にあるのが「亡師亡友の碑」である。本校卒業生と本校に在職した職員で、亡くなられた方を偲ぶ碑である。朝のボランティア活動で子どもたちと田上の森の落ち葉を集めていた時、一人の子どもが「亡師亡友の碑って何？」と聞いてきた。前述したような内容を話した後、ふと私の脳裏に「ひょっとして、戦争中、空襲で亡くなった子どもや職員がいるのではないか」という思いが浮かんだ。学校沿革史では、校舎が

被弾していることがわかった。さらに、校区内の有志がつくられた『あゝ 四月八日 田上の空襲の記録』を見ると、空襲を受けたときの田上小の様子が詳しく載っていた。そして、この日、亡くなった子どももいた。6年生の男子児童である。60年以上前、田上小でも、確実に「戦争」があったのである。

**(2)戦争中の田上小の教材化に至るまで**

60年以上前の田上小と現在の田上小をつなぐため、南日本新聞 平成17年11月30日付「60年目の証言 4・8空襲」を教材化した。証言者田代タエさんは、当時田上国民学校3年生。日曜日だったので、近くの山へ近所の友達7～8人とグミの実を取りに出かける時、米軍機の機銃掃射を浴びた。友達と必死に逃げまどう様子を回想されている。最後に、「その日は学校も爆撃された。あの日が日曜日でなかったらと思うと今でも胸がどきどきする。」という一文で終わっている。

そこで、昭和20年4月8日の田上小学校の様子を知るために、『あゝ 四月八日 田上の空襲の記録』を教材化した。「田上小校区中園地区・前地区爆弾投下位置図」では、田上国民学校に爆弾が落ちた記録が残っている。また、当時田上国民学校の職員であった榎園孝先生の回想録では、正門横で空襲のため亡くなった6年生の男子児童の様子が詳しく書かれている。

このように、新聞や郷土誌などの文書資料の教材化は、日常的に教師が資料を発掘しようという意欲があれば、収集可能である。

**(3)戦争中の田上小を教材として持ち込んだ実際の授業**

**① 60年以上前の田上小と現在の田上小を繋ぐ新聞記事**

新聞記事に出てくる田代タエさんは、当時田上国民学校3年生。子どもたちの先輩である。記事の中の写真で、「あの辺りで機銃掃射を浴びた」と指さしている山は、子どもたちも普段から目にしている風景である。平和

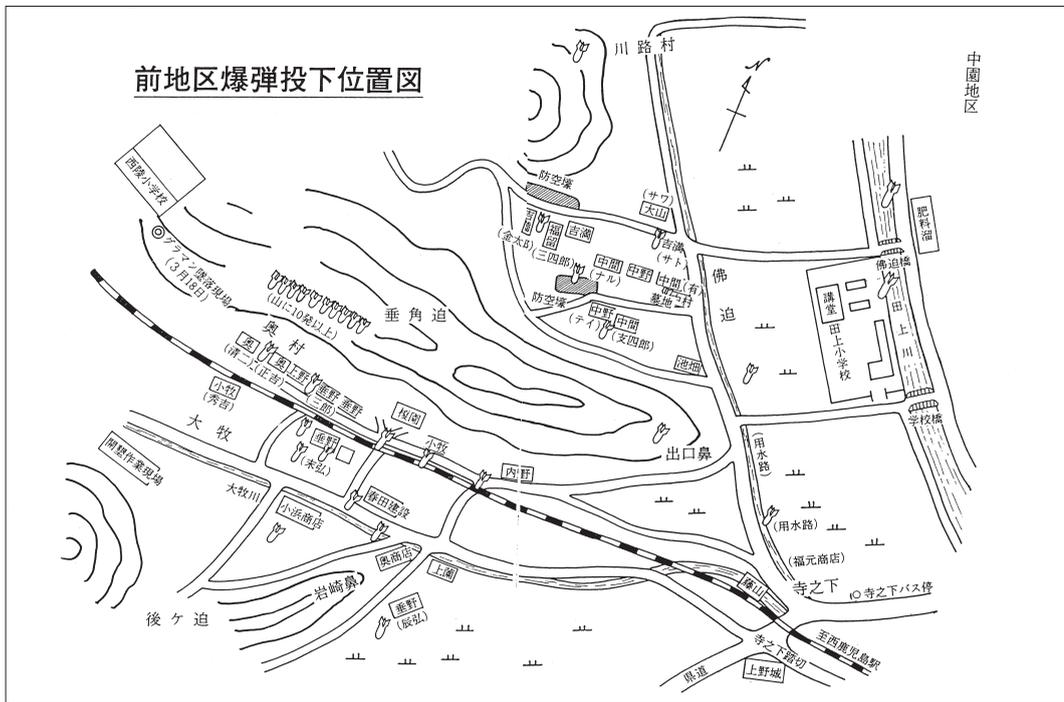
な現代を象徴する写真の風景であるが、記事を読み進めていくと、一気に60年以上前の時代にタイムスリップする。正に、この新聞記事が、子どもたちを戦争のあった時代に導いているのである。新聞記事を読んだ後、次のような感想を述べた。

- ・敵機が来て、茂みに逃げ込み、1m程先に機銃の弾が飛んできたときは、怖かっただろうな。

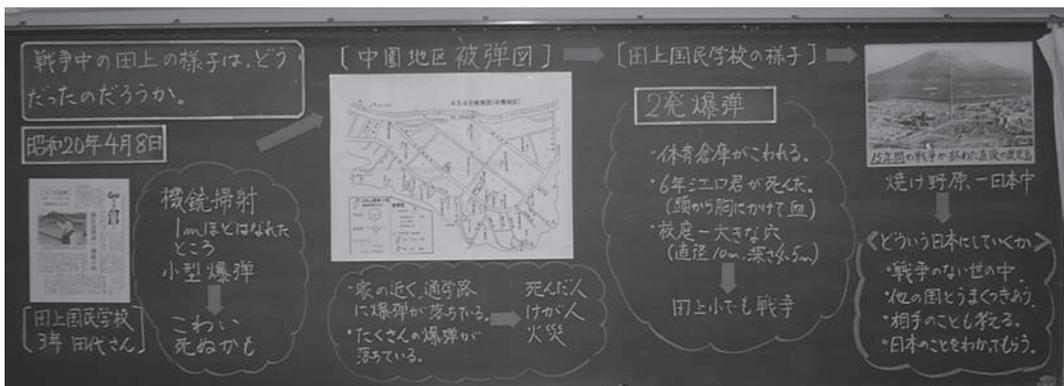
・1年生や2年生も泣くことすらできないということは、恐怖のあまり、今どういう様子なのか、わからなくなっていたのだと思う。

- ・山から転げ落ちるかのように逃げ帰ったということは、早くお母さんに会いたいと思っていたのかもしれない。

記事の最後に、「その日は学校も爆撃された」という文章がある。子どもたちの次なる



●図1/田上小校区前地区爆弾投下位置図



●写真5/田上の地域教材を位置付けた板書

関心は、現在自分たちが通って、勉強したり、遊んだりしている田上小学校、当時の「田上国民学校」の安否である。

② さらに、戦争の時代へと子どもたちを引き寄せる爆弾投下位置図

田上小学校の周辺地区が前地区、中園地区である。2つの地図共に、田上国民学校に爆弾の落ちていることが記されている。しかも、さらに、驚くのは、田上国民学校の周辺にも多数、爆弾が落ちているのである。

2枚の地図を子どもたちに配り、次のような指示を出した。

「地図上の自分の家の場所に赤丸を、友達の家やみなさんがよく利用するお店等の場所に青丸をつけなさい」と。

子どもたちは、赤丸や青丸を次々に付けていく。爆弾投下位置と赤丸、青丸が重なったり、近くに印を付けるときは、一瞬ペンが止まる子どももいた。この作業後、子どもたちは、次のようなことを述べた。

- ・私の家のすぐ近くに爆弾が落ちている。もし、この日、この時、この時代にいたら、と思うとぞっとする。
- ・前地区にも中園地区にも、たくさんの爆弾が落ちている。多くの人が死んだりけがをしたりしたのだろう。
- ・田上国民学校にも2発、爆弾が落ちている。日曜日で学校は休みだけど、校舎はどうなったのだろう。けがをした子どもはいなかったのかな。

爆弾投下位置が、現在住んでいる家の近くであったり、日頃遊んでいる公園やよく利用している商店の近くであったりすることで、子どもたちは、戦争をより身近なものとしてとらえることができた。

田上国民学校も被害を受けたらしいが、その実情は、まだ明らかにされていない。ますます気になる、「田上国民学校」の安否である。

なお、写真5は、田上の地域教材を、子ども

もの意識の流れに沿って左から右に位置付けた板書である。

③ 空襲。その時、田上国民学校は。

空襲直後の田上国民学校の様子を、当時の職員榎園孝先生が「田上国民学校の被爆について」という手記に残されている。田上国民学校の被爆状況として以下のようなことが書かれている。

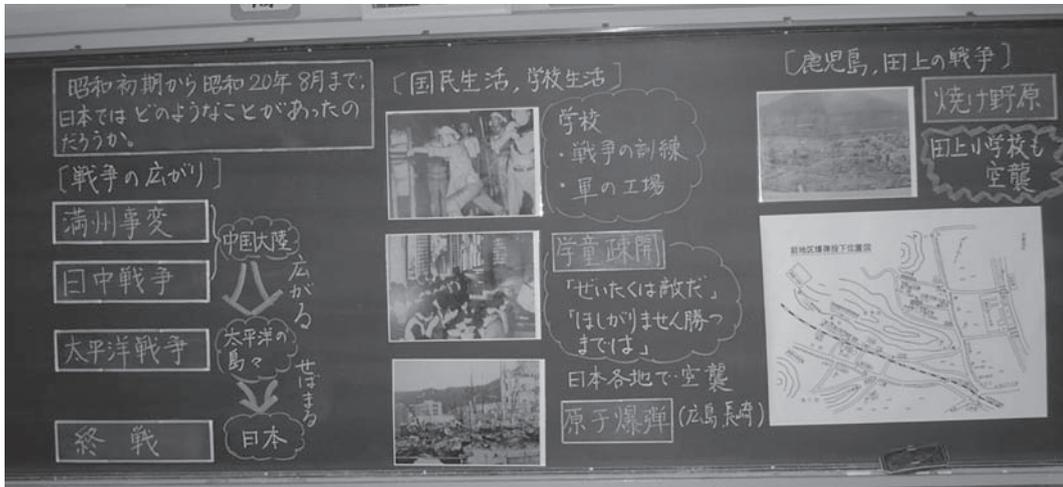
- 校門を入れて、体育倉庫が倒壊していた。
- 体育倉庫のところに、6年生の男子が頭から胸にかけて血を流して死んでいた。
- 4教室が倒壊した。
- 校庭に直径10m、深さ4～5mの大きな穴があいていた。
- 講堂前にトラックで作業にきた人たちが、爆風で吹き飛ばされて死んでいた。

このような内容の手記を読んだ後、次のような意見を述べた。

- ・いつも遊んでいる校庭で、私たちと同じ6年生が亡くなっていた。ショックだ。
- ・日曜日で学校に遊びに来ていたのだろう。それが、一瞬で悲しさに変わった。
- ・この時代は、いつも「生きる」ということと「死ぬ」ということが隣り合っていたように思う。
- ・校舎も被害を受けている。次の日、授業はできたのだろうか。

自分たちと同じ6年生の空襲による「死」。子どもたちは、否応なく、「戦争」というものに向き合わざるを得なくなった。遠い昔の出来事であった戦争を自分のこととしてとらえていく瞬間である。

授業後の昼休み、田上の森の「亡師亡友の碑」に向かう子どもが十数名いた。なお、写真6は、これまで学んだ地域教材が日本の歴史の中にもどのように位置付けられるのかを「まとめ」の段階で整理した板書である。



●写真6 / 地域教材を日本の歴史に結びつけた板書

## 6 | これからの地域教材の開発にあたり提案したいこと

今回の実践の成果として、歴史学習における地域教材の開発の視点として提案したいことが2点挙げられる。

### (1) 視点1：資料館や博物館等の文化財を授業にどんどん取り入れる「本物志向」による教材開発

薩摩国分寺や大隅国分寺の軒丸瓦を教室に持ち込んだときの、子どもたちの目の輝きは、今でも脳裏に焼き付いている。資料館等に、展示、保管されている貴重な文化財ではあるが、授業者としては、できるだけ、「本物」を教室に持ち込みたいと思う。学芸員などとの人的な「学社融合」は行われているし、学芸員の方が持参した文化財を授業で活用する授業はこれまでも行われてはきた。それを、もう一歩進めて、私たち教師にも、文化財を比較的自由に教室に持ち込めるようにし、授業で活用できるようにしてもらいたい。そうすれば、子どもたちの口から、「弥生時代の匂いがする」「鎌倉時代の匂いがする」など、各時代にどっぷりと浸かった授業が展開できるものと思われる。文化財貸出しの「規制緩

和」を強く望むものである。

### (2) 視点2：地域の文献や人物を通して、歴史を「疑似体験」できる教材開発

戦争中の田上小を教材としての実践は、「亡師亡友の碑」からスタートし、田代タエさんという人物、『あゝ 四月八日 田上の空襲の記録』という郷土誌が、子どもの知りたい、学びたいという意欲や意識の流れとリンクしながら授業を織りなしていったものと思われる。特に、昭和史の学習においては、所謂「生き証人」と呼ばれる方々が、まだ多数地域にいらっしゃる。そういう方々と、郷土誌や教科書などをうまく結び付け、子どもたちを「その時代」に誘うという「疑似体験」を授業に位置付け得るのである。地域の文献と人物、そして教科書をセットに考えた「疑似体験」可能な教材開発を行い、それぞれの学校の財産として、いつでも活用できるように整理しておきたいものである。

## 7 | おわりに

今回、子どもたちを歴史にどっぷりと浸らせたい、という願いのもと「発掘教材」と「再発見教材」という視点で開発し、授業で有効

に活用できることが明らかになった。「発掘教材」では、教材を出した瞬間、即、その時代に浸ることができた。一方、「再発見教材」では、じわじわと子どもたちが時代に浸っていく様うかがえた。

この、「発掘教材」「再発見教材」をより効果的に開発していくために、今回、「本物志向」と「疑似体験」というキーワードで、これからの教材開発のあり方を提案させていただいた。今後、自らの提案の実現に向けつつ、更なる実践を積み、子どもたちに歴史学習の楽しさと意義を実感させたい。